インソムニア

黒乃　大和

体験版

腰の上で身をくねらせる、白い裸体。長い髪がうねり、水底の海草のよう。
絶え間なくあがる嬌声が耳に届くも、他人事にしか思えない。
下半身の一点にのみ、湧き上がる悦楽。
しかし、それは彼の思考を煮えたぎらせる事はなかった。
水底に沈んでいるのは、彼。
ただ、この時間が終わる事だけを考える。

決して長いとはいえない眠りから覚める。浅い眠り。
けだるい身体を引きずるようにシャワーを浴びて戻ってきたところだ。
ベッドには、先程の女が背を向けて眠っていた。
長い髪が背にまとわりついている。
丸みを帯びた身体も、腰のくびれも申し分ない。扇情的な身体。

「・・・起きたの？」
「あぁ・・・・学校、行ってくる」
「そう・・・」

億劫な様子で女が身体を起こす。
まだ20代後半くらいか。化粧は落ちてしまっているが、もとの顔立ちが整っているらしく、なかなかの美人だ。
ぽってりとした唇が色っぽい。

「今日・・・ごはんは？」
「いらない・・・バイト」
「そ・・・」
「じゃぁ、行ってくるよ、かあさん」

彼――――小田切　千尋は憂鬱な午前中の授業を、ぼんやりと外を眺めてやり過ごす。
本当なら、学校なんかには来たくはない。
ただ、厳格な父が、一流大学への進学以外ゆるさないからだ。
その父も、単身赴任で関西に行って久しい。
千尋と母親の肉体関係も、それから始まった。
母親と言っても、実母ではない。実母は千尋が中学生の時に他界した。
今の母親は、後妻。若くて、美しかった。
千尋とそんな関係になっても、千尋にはなんの感情もない。
単なる肉と肉の交わり。心は、ない。
ただ、２人の利害関係が一致したからにすぎない。
若い身体をもてあます母。SEXせざるを得ない、千尋の事情。
千尋はおおきなあくびをひとつ。
昨夜はあまり眠れなかった。
深い眠りが欲しい――――

コンコン

社会科準備室のドアをノックする。中から応えがあり、千尋は室内へと入る。
白く煙る室内。
所狭しと並べられた―――散乱していると言った方が適当だが―――資料の中にその人物はいた。
換気扇も回さず、咥え煙草でソファに寝そべっている。

社会科担当の教師、湯沢だ。無精ひげが、彼の自堕落な雰囲気をいっそう強調してはいるが、ワイルドな雰囲気のある風貌をしている。

「先生———くれよ」
「あ？あぁ、・・・好きにしな」

テーブルの上のセブンスターを一本。千尋は手馴れた様子で火をつける。
深く、煙を吸い込んで————うっとりとした様子で紫煙を吐き出す。
ここは、千尋の唯一くつろげる場所であった。
千尋の全てを知っている湯沢。受け入れ、許してくれる。

「お前、午後の授業は・・・？」
「あ～、バックレ。今日はもう、眠い」
「眠い、か・・・」
「あぁ・・・だから・・・」

おもむろに湯沢が立ち上がる。千尋の手から、煙草をもぎ取ると、灰皿へと押し付けた。
千尋の顔を仰のかせ———軽くキスをする。
千尋の顔が、嫌悪に歪んだ。

「————悪い、嫌いなんだよな、キス」
「・・・・・」
「でも、お前の顔を見てると、つい・・・な」

千尋は綺麗な顔立ちをしていた。芸能界からスカウトがあってもおかしくないほどに。
さらさらの茶髪が、うるさそうに目にかかっている。それをかきあげながら、千尋は嫌悪を露にした。

「先生―――キスだけは勘弁な」
「あぁ・・・悪かった」
「それと―――」
「あぁ、それもわかってるから」

湯沢はいきなり千尋のベルトを外しにかかる。
制服のズボンを、下着ごと膝までずりさげる。

「もう、半勃ちか？」
「っせ～よ」

湯沢は躊躇することなく、千尋のそれを口に含んだ。
わざと聞こえるように、ぐちゅぐちゅと音をたてて、舌で扱きあげる。
千尋の手が、湯沢の髪をわしずかみにして、快楽に耐えている。
反らされる白い喉が、なんとも淫猥な光景だった。
千尋は声をあげることはない。
息はあがっていても、終止無言だった。

「―――も・・・いい」
「ん？そうか？」

湯沢は千尋の身体を反転させる。
ちょうど、資料の散乱する机に手をつかせる格好にした。

「もっと、腰あげな」
「・・・・・」
「慣らしてねぇが・・・平気か？」
「―――いいから」

湯沢は、千尋の蕾に自分のそれをあてがう。
慣らしていないから、かなりキツイはずだが・・・。千尋がいいと言うのなら。
湯沢は腰を進めた。

―――友達？そんなものいらない。
―――鬱陶しい。邪魔なだけ。
―――でも・・・・

何故だか、健太郎が傍にいると安心している自分に、千尋は気づき始めていた。
鬱陶しいし、たかだか１０年にも満たない幼馴染。
それだけの――――
しかし、確実に千尋の心は、健太郎によって癒されていった。本人も知らぬ間に。

（でも、コイツには、俺の心の闇は・・・わからない）

「いいか、絶対にここにはついて来るなよ」
「ここって・・・・社会科準備室だろ？勉強か？」
「まぁ、そんなもんだ」
「お前、頭いいモンなぁ・・・・なるほど、課外授業ってやつ？」
「・・・・まぁ、な」

社会化準備室に入る。背後に健太郎を残したまま、ドアを閉め、施錠。
ここにまで来られては・・・・自分の安眠を邪魔されたくなかったのだ。

「先生―――インフルエンザ、良くなった？」
「ああ―――小田切か。済まなかったな、１週間も。辛かったか？」
「ん・・・なんとか・・・適当に。あの女も使ったし」
「・・・・そう、か。」

湯沢が心配するほど、千尋に衰弱の色はない。むしろ、いつもより顔色がいい。

「先生・・・そんなことより、な？」
「お前、寝てないのか？」
「いや・・・あの女と・・・寝たんだけど、浅くてさ」
「そうか・・・・。女は駄目なのかな」
「かもね」

長いすに寝そべる湯沢。咥え煙草で千尋を見上げている。
湯沢に動く気配はない。

「先生、その気ね～の？」
「いや・・・たまにはお前が上になれ。俺は病み上がりだ」
「ちっ・・・面倒くせぇだけだろ」

千尋は制服のジャケットを脱ぐ。だらしなく引っ掛かっているだけのようなネクタイもはずす。
シャツのボタンをはずし、ズボンも下着も脱ぎ捨てた。
千尋には、羞恥心がないようで、何の躊躇もなかった。
無言で湯沢に跨る。
湯沢は、咥えていた煙草を灰皿へと放る。

「小田切、顔の上に来い」

湯沢の顔の上に、千尋の腰がかぶさる。手と舌を使い、十分な硬度まで育てる。
湯沢の舌使いは絶妙で、千尋は背を反らせて快楽に耐えた。
声も、喘ぎもない。ただ、身体がビクビクと反応して、愛撫に答えるだけだ。
湯沢は空いている手で、自分のファスナーをおろし、怒張したものを引きずり出す。
声はないが、ちょっとした反応で千尋の声なき喘ぎを感じ取る。
それだけで、湯沢の前が臨戦態勢に入った。

「小田切・・・自分で咥えこめ」
「やだよ・・・」
「だから、病み上がりなんだって」

仕方なく千尋は身体をずらし、湯沢の腰に身を沈めた。
ゆっくり・・・湯沢の先走りを潤滑油に、ゆっくり。
いつも、相手にさせるにまかせていた千尋だ。自分では動いた事などない。
足を大きく開き、湯沢の太ももを掴むような格好で身体を反らせる。
ぎこちない動きが、いつも耐えていた微かな喘ぎを漏らさせた。

「っ・・・んっ・・んんっ・・・」
「感じてるのか？小田切」
「ちが・・・あ・・あ・・・ぅ」

目元を赤く染め、潤んだ瞳で湯沢を見下ろす。
湯沢の見たことのない千尋が、そこにいた。

「慣れないから・・・つら・・い・・・くっ・・」
「そう・・か・・・いい眺めだぞ、なかなか」
「っかじゃね～の・・・やらせとい・・て・・・ふ・・」

千尋の媚態に耐えかねた湯沢は、半身を起こした。
ソファのスプリングを利用して、千尋を激しく下から突き上げる。
される側にまわって、千尋の喘ぎも止んでしまった。いつもの、息遣いのみ。
だが、普段と違う状況にあったためか、悦楽に溺れる様が、表情にあらわれていた。
恍惚とした表情。
目元を赤く染め、早くイかせろと、艶っぽい視線で物語る。
湯沢はたまらず、体勢を変え、より深く千尋を貫いた。
千尋の先端からも透明な体液が染み出し、やがて白濁の欲望へと変わった。
湯沢の切っ先が、千尋の前立腺を刺激する度、訪れる射精感。
とめどなく、千尋は放ち続け、下腹部にいやらしい水溜りを作る。

「小田切・・・こんなSEX、初めてだな・・・」

なにが千尋をそうさせたのか。
湯沢にはわからない。ただ、わかっているのは、異常なほど感じている身体。
荒い息使いで、それが伺い知れる。
もう千尋に正常な意識はないようだった。視線が焦点を結んでいない。

「は・・・はっ・・はぁっ・・・」

朦朧としながらも、感じている千尋。
湯沢もいつになく興奮し、千尋の最奥へと向けて、欲望を注ぎ込んだ。

千尋は思わず身震いする。
馬乗りになっていた前田が身体をずらし、千尋のズボンを脱がせた。
下着もいっきに剥ぎ取られる。

「やめ・・・ちくしょう・・・・」
「あぁ・・・いい眺めだ。千尋君、綺麗だねぇ・・・」
「よせっ！カメラを止めろよっ！」
「・・・いつまでそんな事、言ってられるかな？」

クククッ・・・と喉の奥で笑う木下。傍観者を楽しんでいる。

「さぁ、思い切り――――汚してやれ」

木下の声を聞き、ふたりの男は動き出した。
前田が千尋の身体を舐めるように、撫で回す。乳首への愛撫も執拗に。
一方の原島は、千尋の手首を片手でひとくくりに押さえると、空いた手で千尋の顔をあお向けた。
木下のカメラに写るよう、千尋の口唇を嘗め回す。
舌で無理にこじ開け、口腔を犯した。オーバーな位の演技じみた舌使い。

「う・・・・ぐぅっ・・・」

千尋は必死に吐き気を堪えた。前田に身体を撫で回される事には、なんとか耐えられる。
しかし、キス・フェラは断わり続けた千尋には、原島の舌は耐え難い責め苦であった。

「溜まらない顔だねぇ・・・そんなに、キスは嫌なんだ。じゃぁ、もっと酷い事もしてもらおうかな」

木下は、興奮を押し殺すような声で命じた。
千尋はいとも簡単に身体を裏返され、四つんばいの体勢を取らされた。
原島が、千尋の髪を鷲掴みにして乱暴に仰のかせる。千尋の口から、うめき声が漏れた。
再び、生き物のような動きで口内を舌で蹂躙される。
千尋の眉はよせられ、眉間に深い皺が刻まれていた。そんな表情を、木下は撮影し続ける。
真性のサドなのか、千尋の屈辱が木下を煽っていた。

「んんっ！・・・ふっ・・・ん・・・」

千尋の口に、無理矢理、原島のモノが侵入してきた。原島も興奮しているのか、すでにかなりの硬度を持っていた。
喉の奥まで、何度も突かれる。自ら奉仕しない千尋は、相手の行為を享受するしかなかった。
吐き気と屈辱に、千尋の双眸から涙が零れた。
それもまた、木下やふたりの嗜虐心を刺激したらしい。原島の動きも激しくなる。
吐き気が抑えきれず、あふれ出した大量の唾液が口の端から溢れ、顎へと伝った。

「ん・・・んんっ・・・・・・ん・・」

唾液のせいで、グチュグチュといやらしい音が室内に鳴り響いた。

「いいね、うん、いいよ。―――ほら、前田。見とれてないで、後ろも汚してあげなさい」

興奮の為、上擦る木下の声に無言で前田は頷いた。

前田は千尋の後ろへまわると、双丘を手で押し広げ、蕾へと舌を這わした。
差し込まれる舌先から、たっぷりと唾液が注ぎ込まれる。舌でほぐし、指も挿入された。
指を増やされ、内壁を擦られる。
だが、千尋は感じる事はなかった。普段から、愛のない SEX はしている。
何をされても、声一つあげることはない。
前田のモノが強引に侵入してきても、同じ事。
ただ、反射で背が反り返る。
後ろも前も———両方の口で奉仕させられる。
嫌悪感しかない。
気持ち悪さだけが、精神を支配して、千尋の涙は乾く事はなかった。

「駄目だなぁ・・・千尋君、もっとこう・・・いい顔してくんなきゃ」

屈辱に、かえって能面のように表情がなくなってしまった千尋。
そんな千尋に、木下はご不満らしい。

「ほら、千尋君のジュニアは萎えてるよ。そこもかわいがってあげようか？」